
平安霧花

西園寺 悠里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平安霧花

【Nコード】

N4715Y

【作者名】

西園寺 悠里

【あらすじ】

ある日、マンションの上階から落ちた主人公藤原撫子ふじのは、気付くと過去へとトリップしていた？

時代はなんと平安時代！貴族達の世界に、未来から来た少女が波紋を起こす。

色んな殿方に言い寄られてみたり、帝からも求愛されたり…。

彼女が過去で選ぶ道は？

登場人物紹介（前書き）

これは、フィクションです。

似たような世界観、時代背景ですが、あくまでも、同じ名前の別世界であり、登場人物などは架空に基づくものです。実在する名前などとは一切関係ありません。

どうぞ、お楽しみください。

登場人物紹介

主人公

・藤原撫子ふじわらなでしこ

……高校1年生で16歳。有名な読者モデル。容姿端麗で成績優秀。通っている塾の全国模試では、常に1位をキープ。偏差値は基本、80を超えている。

非常にサバサバした性格。

藤原氏の子孫。

スリーサイズは上から、95・58・89。

現代の人

・ストーカー

……撫子を付け回し、追い掛けていた。撫子をマンションから落とす犯人。

過去の人

・老夫婦

……過去に来た撫子を、最初に見つけた夫婦。撫子を子供のように可愛がり、育ててくれる。

先祖のとある行いにより、“藤原”を名乗る事を許されている。その為、国司などからは一目置かれている、有力な家系。真面目な正直者。帝を尊敬しているらしい。

共に推定、50歳。

プロローグ 『全ては落下から』（前書き）

これは、フィクションです。

似たような世界観、時代背景ですが、あくまでも、同じ名前の別世界であり、登場人物などは架空に基づくものです。実在する名前などは一切関係ありません。

どうぞ、お楽しみください。

プロローグ 『全ては落下から』

此処は、何処だろう？

目が覚めると、全く知らない場所にいた。

「何故だろ…？さっきまで私…家の前にいたはずなのに…？」

目の前は真っ黒な世界。

見覚えが無いどころか、恐怖すら感じてしまう。

”ズキッ”

突然、頭を激しい痛みが襲った。

「痛いっ！」

その瞬間、ある事を思い出した。

「そっだ…私…」

——落ちたんだ——

…*…

……*…*…*…

彼女、藤原撫子は有名な読者モデルだった。その美貌と頭の良さから、テレビなどでも引つ張りだこである。もちろん、そんな彼女には、世間でいう、「ストーリーカー」なるものも付く訳で。

この日も彼女の背後には人影がいた。いつもの事であったが、油断していたのだ。

今までのストーリーカーは、マンションの前で帰っていたからきつと今日も大丈夫。彼らはボディガードに似たようなポジションにいるだけ。そう、思っていた。

今日はいつもと違う。そう確信したのは、エレベーターの前に来た時だった。エントランスの中まで入って来た後、階段を登

っていったのだ。私がエレベーターに入るのを見計らって。

エレベーターに乗ると、慌てて、鞆から家の鍵を出した。

上についたら、直ぐに走って行って家に入ろう。そう、心に決めてエレベーターが止まると、案の定、ストーカーは近くの階段の前にいた。余り刺激しないように、平静を装いエレベーターを出た。そして、方向を変えると走り出した。

家の鍵を開けた所までは良かった。しかし、追いついてきたストーカーは彼女の手を引き、自分の方へと引き寄せた。バランスを崩した彼女はフェンスへ身を預けようとし、ある事へ思い立った。

「……私はどうして、今日は珍しくエレベーターを使ったんだっけ？ そうだ……階段周りや廊下のフェンスが緩んでいるって回覧板が回って来たからだ……」

気付いた瞬間、彼女の身体は宙へと投げ出された。慌てて手を伸ばしたがその手はストーカーによって振り払われた。

落ちていく瞬間、「君はこれで僕のモノだ」そう、ストーカーが呟いた、気がした。

…*…

……*…*…

「そうか……私……落ちたんだ……」

じゃあ死んだのだろうか？ 死後の世界って、こんな感じなの？

そんなことを考えていると、段々眠くなって来た。瞼が閉じそうだった。

そんな自然的欲求には抗えるはずもなく。諦めて、本能に任せることにして目を閉じた。

そして、目を閉じて直ぐに、意識はより深い闇へと落ちて行った。

誰かに呼ばれた、そんな気がした。

第一話

『此処は平安時代！？（1）』（前書き）

これは、フィクションです。

似たような世界観、時代背景ですが、あくまでも、同じ名前の別世界であり、登場人物などは架空に基づくものです。実在する名前などは一切関係ありません。

どうぞ、お楽しみください。

第一話

『此処は平安時代！？（1）』

浮遊感。暗闇。誰かの声が聞こえる。何で意識がはつきりしてるんだろう？私は、あんなに高い所から落ちたのに。死んじやったハズなのに。

「娘さん！娘さん！大丈夫かい？生きているかい？」

娘さん？私のことなの？誰かが私を呼んでるの？だったら起きなきゃ。動かなきゃ——

——身体が闇の中から引きずり出された——

…*…

……*…*…

「此処は…？」

彼女、藤原撫子は目を覚ました。

1人の老人が、彼女の側にしゃがんでいる。どうやら、彼が起こしてくれたらしい。

「あの…此処は何処ですか？」

「此処は都の近くじゃ。娘さんはどうしてこんな所で倒れていた？」

とりあえず、1つだけ確信した。確実に時代が違う。よくよく見れば、服装も平安時代の農民の服装っぽい。

（もしかしなくても、タイムトラベル？そんな…理論上あり得ない。ここは…記憶喪失のフリをした方がいいのかな？）

「娘さんやーい！生きてるかー？」

「え…？あ、はい！あの…どうしても何故こんな所にいるのか、思いつけなくて。名前しか、覚えてないんです。あの…出来れば、貴方の家に置いてくれませんか？」

老人は、少し、驚いた顔をした後、快く了承してくれた。

「覚えてないんじゃない？まあ、頭を少し打ったみたいだったし。」

思い出すまで、いや、いつまでもいてくれて構わないじゃ。我が夫婦には子供がいなくての。娘さんみたいな綺麗な人がいてくれると嬉しいんじゃない」

人の良さそうなその笑顔に少しばかり、心が痛む。記憶喪失しか、嘘を言っていないのに。

「ありがとうございます。私は撫子と申します。あの…何と呼べばいいですか？」

「撫子か…綺麗な花の名前じゃ。娘のように振る舞ってくれば良い。年はいくつかの？」

「15歳くらいです」

この年齢は、貴族なら確実に結婚の用意をさせられる。失礼な話、落ちた所が農村で良かったと思う。まだ結婚なんて、するつもりはない。

「たいしたものはないが、家に帰って、成人を迎えた事を祝おう。」

さあ、帰るぞ。撫子」

ああ、この人は、私を本当の娘のように扱ってくれるんだ。なら…

「はい、お父様」

私はそれに答えようと思う。

―――始まるんだ。私の新しい生活が―――

……*

…°……°…°

第一話

『此処は平安時代！？（1）』（後書き）

随分と遅くなり、申し訳ありませんでした。

なんと、最近、リア友が同じサイトさんで投稿してた事が
発覚。かなりびっくりでした。

さて、これからは撫子の新しい生活が始まります。
これからもよろしく願います。

『此処は平安時代！？』（2）』（前書き）

これは、フィクションです。

似たような世界観、時代背景ですが、あくまでも、同じ名前の別世界であり、登場人物などは架空に基づくものです。実在する名前などとは一切関係ありません。

どうぞ、お楽しみください。

『此処は平安時代！？(2)』

――新しい生活が始まる――

・・・

・・・・・

撫子は、新しい家に着いた。そこそこ大きい家だ。どうやら、この村では有力者らしい。

「大きい家……」

「まあ、この村では一応名の通った家じゃ。さあ撫子、入りなさい」「はい、お父様」

撫子は、家の中へと足を踏み入れた。

・・・

・・・・・

「ばあさんや。こつちに来ておくれ」

少して勝手の方から、年老いた1人の女性が出て来た。

「その娘さんは誰だい？」

「この娘さんは撫子といって、少し記憶のない娘さんじゃ。私達の娘として、育てる事にした。これから、色々と教えてやってくれ」

「そうかい。よろしくね、撫子」

「これから、よろしく願います。お母様」

「それはそうと、着替えたらどうだい？その着物はボロボロじゃないか」

よくよく見ると、制服は見るも無惨な状態であり、辛うじて身体が隠れている状況だ。ローファーは脱げたのか、無くなっている。

(だから、洋服なのに不思議がられなかったのかしら?)

「ばあさん、撫子の着物の用意と、成人を祝う用意をしておくね。彼女は15歳くらいだそうじゃ」

「はいはい、分かってますよ」

そう言うと、義母となる女性は、奥の方へと入っていった。

「あの…成人を祝う用意とは…？」

「そうか…あまり覚えていないんじゃないかな。上流階級の女性の方は、装着の式と呼ばれる物をやられるんじゃない。それと同時に、髪上げもなさる。しかし、ここは農村じゃから…髪上げしか出来ぬ」

「（農村の成人の儀なんて習わなかったから、正しいのか分からない…）そうなんですか…あの、名が通っている家とは？」

「この家では昔、”藤原”と名乗る貴族の方を泊めた事があるそうじゃない。その時、先祖の方は貧しいながらも精一杯のもてなしをしたそうじゃ。それに感動したそのお方が、”藤原”の姓を名乗る事を許して下さったそうでの。それからは、国司様も、我が家に下手な事は出来なくなったのじゃ」

「という事は、私は藤原撫子ということですか？」

「まあ、そういう事になるの」

彼女はホツとした。それなら、間違えて「藤原撫子と申します」と言ってしまう事もない。自分の本名なのだから。

「着物の用意が出来ましたよ」

奥から義母が出て来た。手にはそこそこ綺麗な着物と髪紐を持っている。

「私が昔、着ていた物だけど。今撫子が着ている物よりは良いと思うよ」

そういうと、撫子に着物と帯を渡した。

「着方は覚えているかい？」

幸い、撫子は仕事の関係で、着物の着付けを経験した事があった。

「はい、覚えています」

「じゃあ、着替えておいで」

そう言いつつ、撫子は奥の部屋に連れていかれた。

…* -

*
。
。
*
:
。
。
。
。
。

『此処は平安時代！？』（２）』（後書き）

実は、藤原という苗字の件云々は、ここだけ実話なんです。

私の中学時代の同級生に藤原〇〇という男子がいて、その人の苗字の成り立ちが『藤原氏を家に泊めてもてなしたことにより、名乗ることを許された』ということでした。

これを聞いた時はビックリし、少しばかり使わせて頂きました。

決して、全てが実際にありえないことで出来ているというわけではないです。

ここまで読んでくださり、有難うございます。

『此処は平安時代？』 (3) 『(前書き)』

これは、フィクションです。

似たような世界観、時代背景ですが、あくまでも、同じ名前の別世界であり、登場人物などは架空に基づくものです。実在する名前などは一切関係ありません。

どうぞ、お楽しみください。

『此処は平安時代？ (3)』

――撫子が奥の部屋に連れていかれた――

・：*・

*・
・
*・
・
*・

数分後、撫子は居間に戻って来た。
着物を美しく着こなして。

「なかなか似合っじゃないか」

「ありがとうございます」

義母は白い髪紐を取り出すと、

「撫子、後ろを向いておくれ」と言った。

義母はその紐で撫子の髪を後ろで束ねた。

そして、前髪を綺麗に整える。

「こんな事しか出来なくて悪いねえ。これからはこの家が撫子の家だ。自由に使いなさい」

「ありがとうございます」

「さてと、私は飯の支度でもするから。何かあったら、じいさんに聞きなさい」

そう言い残すと、義母は竈かまどのところへと行った。

「お父様、私は何をすればよろしいですか？」

「記憶がないと、色々と初めての事もあるだろう。慣れるまでは、特に何かをする必要はない。少しずつ、出来る事を探していけば良いんじゃないか」

そう、優しく義父は言った。

「では、お父様の仕事を見てもよろしいですか？」

「構わんよ。ただ、撫子のような若い女子おなごがやる仕事ではないだ

ろう。わしらがもう少し裕福だったなら、歌などを勉強し、結婚相手を探すんじゃないか。すまんのぉ……」

「いえ、まだ私は結婚しようなどとは考えておりません」

そう言っていると撫子は花が咲くように笑った。

「お父様は、この後、何をなさるのですか？」

「もう冬じゃからな……。藁わらを使って米俵を編もうと思つとるんじゃないか」

「米俵…ですか？」

「そろそろ、年貢を納める時期じゃからな。それに間に合うようにしなければならぬから」

「そうですか」

2人は外へと出て行った。

「さあ、平安時代の生活の始まりね」

撫子は誰にも聞こえないよう、そつと呟いた。

。。。。*

。。。。

第二話 『新しい生活（1）』（前書き）

これは、フィクションです。

似たような世界観、時代背景ですが、あくまでも、同じ名前の別世界であり、登場人物などは架空に基づくものです。実在する名前などは一切関係ありません。

どうぞ、お楽しみください。

第二話 『新しい生活（1）』

私がこの世界に来て、どれくらいたったのだろうか。

カレンダーも時計もないこの世界では、日にちの経過が分からない。何となく、三か月間ぐらい経ったかな？という程度の認識だ。

そろそろ、桜の開く季節も近いのかもしれない。

とりあえず、この世界で1つ、確実に成長したことがある。星座がある程度分かるようになった。

名前を知らずとも、形、配置を知っているだけで、大きなメリットになる。

何せ、この世界の暦

太陰暦は不正確なのだ。

月の満ち欠けによる暦なんて、分かりにくい。

月が28・5日を周期としている以上、ズレるのが当たり前なのだから。

日にちは忘れてしまったとしても、季節がなんとなく分かっていたら、まあ及第点ではないだろうか？

* . . . * : : * . . .

私に来てから、生活が苦しくなったようだった。

もともとから、この時代の農村はあまり裕福ではないはずなのだ。税の負担から逃れるために、貴族に土地を進呈した農民だっている。

そんなところに私は来たのだ。

人数が増えれば、もちろん出費も増える。

いくら、そこそこ裕福な名の通った家だとしても、辛い事にかわりはないはずだ。

しかし、私が何か畑仕事を手伝うと言えば、危ないから構わないとかえってくる。

だといって、何もしないのも居心地が悪い。
何か、私に手伝える事はないのだろうか・・・？
そう考えていたとき、お母様が織っていた布が目にとまった。

。。。：。。。。：*。・

「お母様、布を織っているのですか？」
撫子は突然話しかけた。

「ええ、納めなければならぬから」

そんな突然の問いにも、しっかりと答えてくれる。

「余った布や、糸はありますか？使いたいのです」

「布は少ししかないけれど、糸なら沢山ある。そんなに危険な作業でもないから、私が使わない時は、自由に使うといい。布の織り方は分かるかい？」

「ええ、分かります。お母様が織るのをずっと見ていましたから」
まさか、あっさりと返事がもらえるとは思わず、少し撫子は驚いた。
しかし、そんな驚きに義母は気付かず

「糸を作る作業は大変だし、危険であるから私がやるう」
どこまでも過保護な義母である。

それでも、布を織る許可は撫子を喜ばせた。

正直なところ、何もしないこの数か月間、暇で暇で仕方がなかったのだ。

「さてと、私はおじいさんの手伝いをしてくるよ。ついでに糸の材料もとってくる。今日はもう使わないから、自由に使うといい。ところで撫子、これから少しの時間、家に1人になるから気を付けるんだよ。お前は綺麗なんだから」

「大丈夫ですよ。心配のしすぎです。襲われたりなんかしませんから」

「それでも、気を付けるにこしたことはないよ」
義母はそう言うと、外へとでていった。

撫子は、義母が出ていくを見送ると、座って布を織り始めた。
起用な撫子は、義母を遙に上回るスピードで布を織っていく。
撫子の周りには、早くも布の山ができていた。

* . . . * . . . * . . . * . . . *

『新しい生活(2)』(前書き)

これは、フィクションです。

似たような世界観、時代背景ですが、あくまでも、同じ名前の別世界であり、登場人物などは架空に基づくものです。実在する名前などは一切関係ありません。

どうぞ、お楽しみください。

『新しい生活(2)』

。。*。*。*。*。*。*

「ああ、おじいさん。撫子が布を織りたいと言っておったので。今、あの娘は一人で家にいるよ」

家を出た義母は義父を見つけるとこう言った。

「なあ、ばあさんや」

突然、彼は話を切り出した。

「何ですか？突然？」

「お前さんは…竹取物語を知っているかい？」

竹取物語。それは、撫子のいた世界では『かぐや姫』と呼ばれる日本の童話だ。

「もちろん、知っていますよ。どうしたんですか？」

「わしはな…時々、撫子がかぐや姫ではないかと思う事がある」

何も言わずに、彼女はただ黙って先を促した。

「突然現れて、その家の中を幸せにし、結婚を拒み、やがて去っていく…。本当はあの話は作り物だと理解しているはずなんじゃがな」

「ほんに。それに私らがもう少し裕福な家だったなら、とも思いますよ。立派に嫁いで、幸せになれるんですから」

「まあ、撫子はそれを望んじゃあいないみたいだがな」

彼はしみじみとそう言う。

「あの娘が幸せになれる方法はないのかね…」

彼女もそういつて、悲しそうに笑う。

「あの器量なら、身分さえよければ帝のもとにお仕えすることも出来ようものを…」

きつと、帝にお仕えし、子供を産めることが、上流階級の女性にとつての一番の幸せ。

たとえ上流階級でなくても、中流階級ならば更衣としてだったり、

女房として宮中の女性に仕えることができる。

しかし、彼らには身分が足りないのだ。

「彼女を養子に貰いたいと言う、貴族の方がいれば良いのに……」
養子にしてくれる人が現れれば、彼女の世界は広がる。

しかし、それは同時に、彼女の自由を奪うことにもなりかねない。

「一番良いのは、彼女の身分が低いうちに、外に出すことです
ね」
身分が低い人間なら、女性でも外に出る事は出来る。

そして、養子にしたいと申し出てくる人が現れたのなら、彼女の
意思に合わせる。

送り出すかどうかは父親の権限なのだから、その意思を元に考
えれば良い。

一番大切な事は、大事な娘の幸せを一番に考える事なのだ。
彼女の幸せになる道は何なのか。

2人はそんな事を考えながら、畑仕事をはじめた。

* . . . * . . . * . . . *

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4715y/>

平安霧花

2012年1月4日02時46分発行